短歌

散文精神と即物性
若山牧水の魅力 再確認

伊藤 一彦

今月十八日を中心に沼津文学祭が開かれた。市制施行八十周年を機に沼津市ゆかりの文学者を顕彰し、今後のまちづくりに活用していきたいとの目的という。さすが芹沢光治良、井上靖、大岡信などを生んだ文学的風土豊かなまちである。心の時代と言われる今、文学の大切さは言うまでもないからだ。

第一回の今年の沼津文学祭は若山牧水を取り上げた。牧水は晩年八年を沼津で過ごし、後期の充実した作を歌った。十八日当日はまずドイツ文学者の池内紀が「牧水は何を見たか」と題して講演し、抒情歌人と見られがちな牧水の散文精神と即物性ある表現を新たに評価し直した。沼津牧水会発行の「幾山河」十六号の池内の評論「記録者の目」にもその考えの一端は記されているが、牧水再評価の観点だけでなく、私たちが今日ものを見るとはどういうことかについても示唆多い内容だった。その後は牧水をめぐって歌人によるシンポジウムや牧水作品の朗読などが行われ、多くの市民が聞き入った。

佐佐木幸綱著『男うた女うた―男性歌人篇』(中公新書)が愉しい。千三百年の短歌史の中から男性の歌六十首を取り上げているが、簡潔な文章の背後に読者の想像が豊かに広がる。有名な歌と同時に珍しい歌も取り上げられている。有名な歌ではたとえば牧水の「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」。佐佐木はこの白鳥について空を飛んでいる説と海に浮かんでいる説の両方があることを紹介し、自分は「晴れた日の海をながめているゆったりとした視線がこの一首の背骨と見る」ので後者の説を採ると書いている。沼津文学祭では牧水の「短歌を絵にしよう」の子ども達の入選作品が展示されていたが、或る中学二年男子の生徒は、空を飛んでいる鳥の姿とその鳥が海に映っている姿の両方を描いていて、その苦心の解釈に感心した。

男性の新刊歌集を二冊。『暁』(短歌研究社)は来嶋靖生の第八歌集である。

・風に揺れかがよふ一華眼に収め歩幅狭めて下降路に入る

・息あへぎここに至れる踏み跡もほどなく消えむわれ人ともに

山に登る歌が多く、また魅力である。或る山の頂上で呼吸困難となりヘリコプターに救われた歌もある。

『独孤意尚吟』(不識書院)は清水房雄の第十一歌集。

・戦中派つぎつぎこの世を去つてゆき而して再び戦争が来るのか

・いま一度宣戦布告でもするかそれ程あの国が気にくはぬなら

老いの平隠に見える日常の暮らしを歌いつつ、ふと呟くように歌われた言葉が重い。二首目から来嶋の『暁』中の「事故ありてニューヨークに原爆炸裂す不機嫌なる日のわが白昼夢」の作を思い出した。

(歌人)